

新制

経

232

## 学位審査報告書

(ふりがな) 氏名	よねだしょうへい 米田昇平
学位(専攻分野)	博士(経済学)
学位記番号	論経博第 340 号
学位授与の日付	平成 20 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学位規則 第4条第2項該当
(学位論文題目)	
欲求と秩序ー18世紀フランス経済学の展開ー	
論文調査委員	主査教授 田中秀夫 教授 八木紀一郎 教授 根井雅弘

## (論文内容の要旨)

本論文は、18世紀フランス経済学の展開を「欲求と秩序」の思想として、啓蒙の功利主義的な人間観との関連で把握することを目指すものである。

第1章は、コルベールやヴォーバンを批判し「人民の弁護士」を自認したボワギルベールを論じる。17世紀にジャンセニストやリベルタンによって人間の利己的情念に本性をみる功利的な人間像が成立したが、その継承者として彼は、『フランス詳論』などで、富裕を求める利己的情念は、墮落したものではあるが、社会的結合の原理であり、経済世界に内在する自立的なメカニズムに媒介されて秩序を生むとして、「欲求と秩序」を一体のものと把握する経済思想を構想した。欲求の追求は農業の発展を起点に各種の職業を生み、相互に依存しあった富裕の連鎖が成立する。この連鎖は交換、取引、貨幣の円滑な循環を必要とする自然的自由でなければならないから、コルベール主義は批判される。

第2章は、ムロンの商業論を取り上げる。ローのシステムの擁護から出発したムロンの奢侈擁護論で著名な商業論は、ペティ、チャイルド、マンデヴィルなどを参照しつつ展開された貨幣供給の増大論、「自由と規制」を適切に運用する統治システム論の提唱と合わさって、フランスで初めて経済諸問題を体系的に論じたものであるが、それはボワギルベールの農業に基づく自然的秩序をグルネやフォルボネの産業主義へと媒介するものであった。本章は、ムロンに発し、デュト、パリス・デュヴェルネへと展開される貨幣論争、そしてムロンからヴォルテール、モンテスキューへと展開される奢侈容認論の系譜を辿り、富裕の科学の形成の一環に位置づける。

第3章が問題にするのはカンティロンの経済学の複合性である。彼の経済学は、静態的な経済循環を描く地主社会モデル＝閉鎖経済モデルと、貨幣量の変動や貿易に起因する盛衰の動態を把握する開放経済モデルという二重構成からなる。彼は地主の主導を説く一方で、現実主義的な企業者理論を持ち、価格理論、労働理論、貨幣理論などの展開を通じて複合的な要素を取り込んだ。彼は、ロックの貨幣の機械的数量説を継承し、レセ・フェールは富国・貧国の交替に繋がるとし、富国は比較優位を維持する政策を必要とするとして主張した。その価格理論はイギリス古典派につながり、労働－貨幣－外国貿易の関連分析は、デイリジスムとともにグルネ、フォルボネの生産力主義を介して産業主義の源泉となった。また地主社会モデルは、ボワギルベールの農業的秩序の論理をケネーの重農主義に媒介するものであった。

第4章ではグルネとフォルボネの「自由と保護」の経済学を「草創期のフランス産業主義」として把握する。行政官グルネは、生産力を重視して、先進イギリスの外圧に対抗する城壁を主張する一方、コルベルティズムの規制体制を廃棄し、自由と競争の原理を貫こうとした。彼は「自由と保護」の両面政策を実施すると共に、チュルゴ、フォルボネ、モルレ、プリュウマル・ド・ダンジュールなどの後進を指導した。チュルゴはケネーの登場後、重農主義に傾斜していくが、フォルボネは奢侈容認論に立って、グルネの生産力主義、ボワギルベールの「欲求の論理」を「産業主義」へと結合した。

第 5、6 章はケネーを対象とし、自然的秩序として把握された特異な地主主導の再生産論を分析し、価格理論と利潤論に光を当てる。ケネーの資本理論はボードーとチュルゴに継承されるが、農業のみ生産的とする立場は克服されなかった。第 6 章はケネーの体系における地主に対して彼が求めた「知性の自由」の内実を明らかにし、合法的専制といわれる統治論が、恣意的な権力の介入を許さない、自由な秩序として構想されていたことを解明する。マルブランシュやコンディヤックの認識論に影響されたケネーにとって、自然的秩序は神による秩序として先験的所与であり、人間の自由は、この超越的秩序の实在に向かう「知性の自由」であるほかなかった。

第 7 章は、グラスランとコンディヤックによる重農主義批判を取り上げる。グラスランは効用価値説を徹底し、平等な社会を求め、消費累進課税をよしとした、ユニークな欲求と秩序の思想家であった。しかし、彼にとって、カンテイロンの富国・貧国交替論は容認できるものではなく、重商主義的な規制が不可欠であった。自己完結的な演繹体系に向かったグラスランを継承したコンディヤックは、効用理論を感覚論に基礎づけて、経済分析に快苦原理を適用し、演繹体系の構築ではなく、現実分析に向かった。彼は商業の自由を求めたが、それは自由競争が小麦の真実価値を実現し、労働-稼得関係の安定をもたらすからであった。彼は、過度の洗練による習俗の腐敗を断罪し、奢侈を非難する。奢侈は個人の破滅を招き、労働-稼得関係を毀損するからである。彼は過度な分配の不平等を批判したが、特権を廃止し、自由競争を導入すれば、こうした腐敗、不平等、奢侈は解消し、豊かな社会が出現するであろうと考えた。

第 8 章は、奢侈論争と経済学の関係を中心にすえ、奢侈から節約へと議論の力点が推移していくプロセスを描いている。マンデヴィルやムロンは消費の経済的意義に注目して奢侈を肯定した。それは商業社会の出現に伴う価値観の転換に対応していた。フォルボネは「国民の奢侈」構想によって、大衆消費、生活改善に直結する奢侈を肯定したが、虚栄心に基づく「過度な奢侈」は排除した。しかし、ルソーやコンディヤックのような奢侈批判は後を絶たない。やがて経済学は新しい根拠から奢侈を批判する。ヒュームやピントの節約の論理、ケネーやボードーの資本理論、それらを総合したチュルゴとスミスの資本蓄積論がそれである。マンデヴィル、ムロン、フォルボネの奢侈容認論と経済学の関係は、こうして切断される。しかし、にもかかわらず、奢侈容認論はビュテル・デュモンなどによって展開され、功利主義、有効需要と合わさって、19 世紀に継承者を見る。

補論ではフランス革命後の社会の再組織化という課題に答えたデスチュ・ド・トラシの産業主義の登場に光を当てる。貧困と分配の不平等に直面した彼は、貧民の所有権の尊重、技術革新による生産性の向上・低価格、勤労階級の連帯と労働と資本の協働の 3 点を解決策として提示した。

## (論文審査の結果の要旨)

シュンペーターは『経済分析の歴史』においてケネーやチュルゴの独創性を高く評価し、スミスの経済学を凡庸な総合として過小に評価したが、その後の、経済学史研究は、経済学の主流を英米(アングロ・アメリカ)に求め、英米の系譜への圧倒的な関心を示してきた。しかし、そうしたなかで、オーストリア学派や歴史学派、ワルラスやパレートなどの経済学の研究も着実に進んできたし、経済学のフランス的伝統に関する研究も緻密になってきた。

本論文は、津田内匠によるグルネやカンティロンのテキストの発見が起点となって活性化した18世紀フランス経済学史研究を継承して、重農主義と対抗する、フランスの啓蒙時代=アンシャン・レジームにおけるもう一つの経済学の系譜を、「欲求と秩序」、「保護と自由」の経済思想として掘り、「地主社会」ならざる「産業社会」への展望を持つ経済思想として描き出そうとした意欲的な研究である。「ケネー中心史観」の相対化に成功したかどうかについては、異論もあるが、貴重な労作であることは否めない。米田は津田をも超えて、功利主義的な人間観が生み出す「欲求の体系」と、独自の生産力理論に立脚した「富裕の科学」の形成という二つの特徴に集約してフランス経済学を啓蒙思想との関連で統一的に把握した。

本論文の成果のうち重要なものを個別的に挙げよう。第一に、従来の研究が重商主義と重農主義の対抗、後者による前者の克服として捉えがちであった18世紀のフランス経済思想の展開を「産業社会」への展望をもつ「欲求と秩序」の経済思想として把握することは、新しい総合的な視点による斬新な把握であると言ってよい。その視点からポアギルベールからド・トラシまでの一連の経済学者の理論と思想の緻密で首尾一貫した分析がなされている。ポアギルベール、ムロン、カンティロン、グルネ、フォルボネ、ケネー、グラスラン、コンディヤック、ピュテル・デュモン、ド・トラシに章が割かれており、彼らの経済認識や社会構想はもとより多様であるが、「欲求と秩序」をめぐる議論の多様性として、統一的視野のもとに把握された。

第二、本書の要を成すのは、紙幅では少ないが、グルネとフォルボネの産業主義分析である。タイトルは「欲求と秩序」という包括的なものが選ばれたが、生産力視点を持った産業主義によって初めて、重農主義の隘路が克服され、経済学が本流に立つことになるし、それが先駆的に実現されるのはグルネとフォルボネの「自由と保護の経済学」においてだからである。イギリスの優位認識を持った彼らはレセ・フェールに一元化できなかったが、彼らの産業主義は重農主義を超えるものを持ち、革命後の産業主義を用意したという解釈は新鮮である。

第三に、本書のなかで紙幅が最も多く割かれているのはケネーであるが、ケネーについても、その地主主導の農業中心主義が、決して権力の経済への介入を容認するものではなく、自然秩序としての農業の再生産秩序が「知性の自由」によって認識されるときに、最も繁栄するというケネーの自由主義的な自然法思想の固有性を抉り出す明快な解釈がなされている。

氏名

北田昇平

第四に、ムロン、フォルボネ、グラスラン、ピント、ビュテル・デュモンなどの理論と思想は、本論文によって初めて体系的な分析がなされ、学界に紹介された。ムロンはヒュームの『政治論集』の知的源泉としても重要であるが、奢侈容認を提起した彼の『商業論』の全体がわが国で初めて本格的に分析された意義は大きい。本論文は、奢侈論争の系譜についても詳細な分析を行っており、奢侈容認論がやがて「節約」と「蓄積」の概念によって克服されていく過程を鋭く描いている。カンティロン以降の企業者論、ボワギルベールに始まりケネーに受け継がれる経済循環論、ムロンやデュトの信用論の独自性と先駆性にも光が投げられた。

多くの原資料も膨大な二次文献も徹底的に読みぬいて書き上げられた本論文の達成はこのように大きい。しかし、残された問題もまたある。第一に、フランスの経済思想は、経済が秩序ではなく反秩序に至る可能性も視野にあったと思われるが、その点が考慮されていないこと、第二に、ケネー解釈において、彼の資本理論や再生産論が十分には評価されず、ケネーと重農主義の独自の意義についての積極的評価がないことを指摘しなければならない。これらの点は学史家を納得させえないであろう。

また各論者の分析に関して、経済史的背景の描写が少ないのが、説得力を削減している。18世紀フランスが経済社会としてどのような特徴を持っていたかという、経済史を中核とした背景の描写があれば、緻密な分析がより説得力を持ったであろう。政治思想分析も、政治史的背景の描写も希薄である。さらに啓蒙思想との関係を標榜する本論文であれば、ニュートン主義との関連、アウグスティヌスとエピクロス主義の影響、新ストア主義、シャーフツベリなどのイングランドの思想の影響、そしてマキアヴェリズムや共和主義などにも触れて欲しかったし、フランスの思想的伝統のもう少し濃密な描写と評価もほしかった。循環の概念と医学や生物学との関係も捨象されているし、ケネーの体系の精神とカルテジアニズムの伝統の底流との関係も問題とされず、マブリやモレリなどのフランス社会主義はほとんど視野の外に置かれている。『百科全書』の経済論にももう少し立ち入る必要があるだろう。

こうしたことは残された問題であると思われるが、しかし本書の独創的で明確な経済学史的な分析が成功するためには、そのような事項を思い切って切り捨てる必要があるのかもしれない。いずれにせよ、本論文の価値がそれによって損なわれているとは言えない。歴史研究はさまざまな水準で遂行できるからである。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成20年6月3日、論文内容と、それに関連した試問を行った結果合格と認めた。